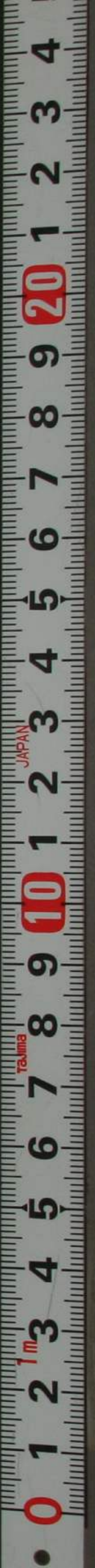




敵討野吹
 上川
 前篇
 壹

百廿六
 九
 九

遠
 975
 1



遠門
975
卷 1

皇朝御覽
卷之九
後頼朝臣

本清

千載集

あはれもあんな野路の
玉川

あはれもあんな野路の
玉川
あはれもあんな野路の
玉川



皇朝御覽
卷之九

千載集

前編五冊
後編四冊
全部

あはれもあんな野路の
玉川



ロノ

小男鹿の志ついでに松本好くく月も色ある野路は玉川と
 古き奇よ海より近江乃國形。勢因と草津の間や〜と為
 月門のふせ松と存せしむるは玉川のほとり松をさし〜と人の
 繁と後して母ふまふとあ〜とせしむる松と物〜と人の
 あ那と〜と松の原の床は懸ひるも夏は月の色〜と人の
 あひひ出つ腰〜とけさ〜と候初お語りつ〜と早くも書肆の
 関はけ〜とそり作は紀〜と玉のこ様〜とよ〜とせ〜とひ〜と例は
 松尾ののち〜と人〜とさう候は任せ〜と只〜とつ〜と人〜と〜と書志〜と
 つ〜と勸善慈恵の一冊〜と那〜とせ〜と〜と書志〜と

松尾ののち〜と



浪速御津之濱天皇祭遼物見附臺之圖

續古今集
松もあひ又もあやう

石清あはれとて

となくつ〜と

中川松ん

貫之



いで
出^で扮^ら
之^の圖^づ

湯屋^{ゆや}辰^{とら}

若菜^{わかしな}摘^と



移^{うつ}り
遼^{りょう}物^{ぶつ}
優^{ゆう}姿^{すがた}

羽衣^{うい}
と^ろも

懸^か想^{そう}
文^{ぶん}賣^{ばい}

末^{すえ}廣^{ひろ}

野路^{のり}の玉川^{のたまがわ}



鶉飼うらひ

一夜宮女いちやみやうむすめ



婢女ひめ

秦始皇帝あんの

華陽夫人けいようふじん

野路の玉川のろのたまがわ



野路の玉川一





肥前ひぜんの
 王島おうじまの
 角力取かくりきとり
 環山わんざん
 力右衛門りきゑもん
 水尾木屋娘阿卷みづおのきやむすめあまのま



越中多枯島あつちゅうたこくしまの
 悪俠あくてき
 浮洲うきしゅうの
 岩右衛門いわゑもん
 同子分どうぶん
 鐵火の堂六てつゐのどうりく

阪松屋仲居
阿熊

阪松屋の料理人
心助



環山門弟
沖津浪龜之助



環山一子
金剛力藏

復讐野路の玉川前篇目標

卷之第一 澱川の春色 舟路の闘諍

卷之第二 嵐山の花曇 川邊の莖草

卷之第三 橋邊の夜嵐 野外の朧月

卷之第四 故郷の占夢 霊場の夕顔

卷之第五 廢宅の清風 濱路の夏草

都合五卷通計十回

復讐野路の玉川卷之一

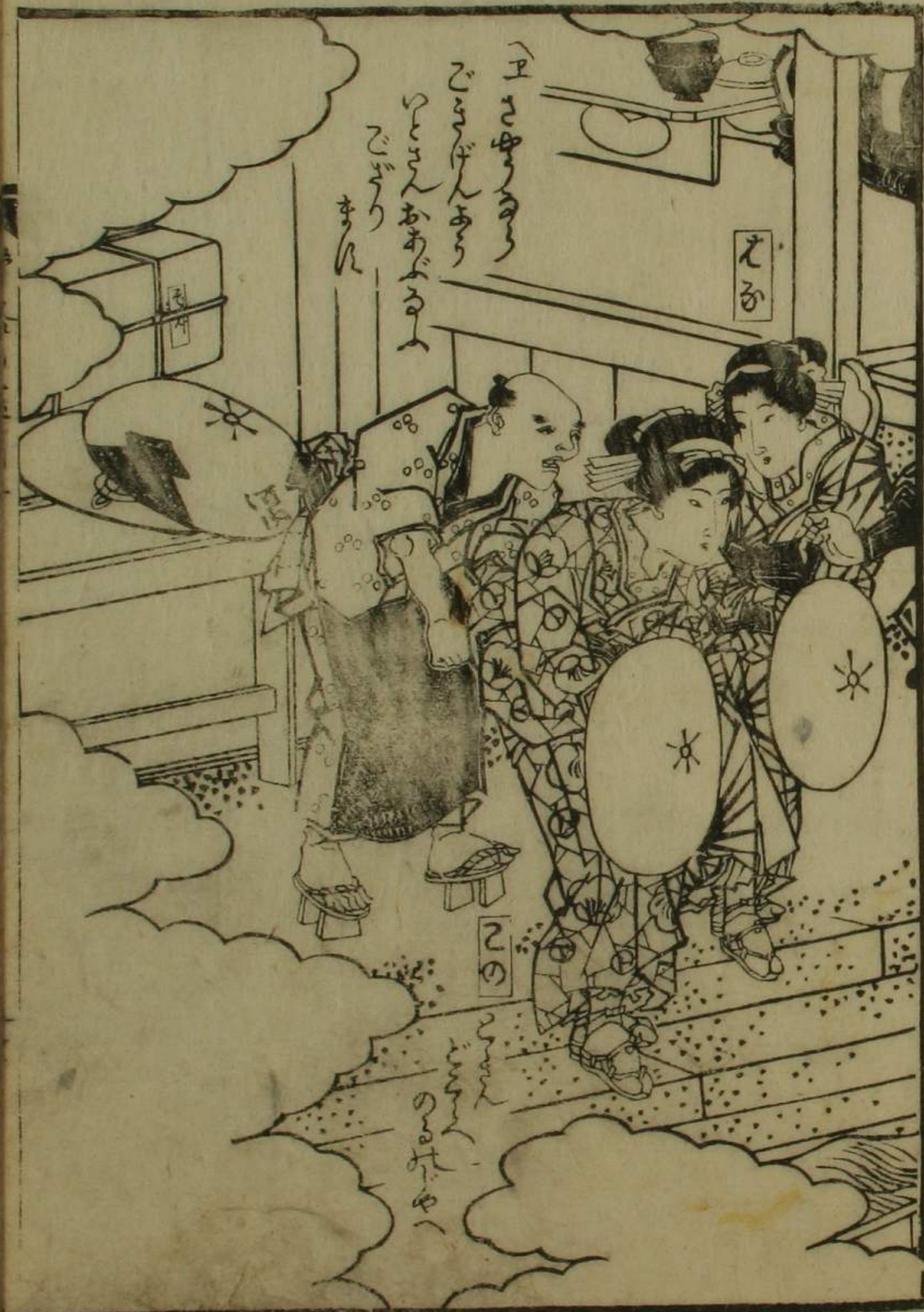
滄海堂主人編述

○澱川の春色

洛西嵐山の大偃川の南は聳へる山中に數株の櫻あり是は古昔龜山の上皇吉野の櫻と愛せむ此は移しうゑるゆひより俗に都の吉野と稱す斯る名所とい成るをいふ彌生の盛よ遠近人羣集ひ幕うちらるる酒宴を催し詩作り哥よみて幽艶を賞以俎亦この嵐山乃麓

法輪寺といふ佛場ありて此本尊なる虚空藏菩薩にせよ
 靈驗ありしゆ。智福とゆふとて滝の垢離し断食し。
 祈念する輩常に絶於殊に三月十三日ハ十三才より男女
 都鄙より詣て群集すること大くさあは是と俗に十三詣と
 号く。實や花のさうりハ立春より七十五日大中遠ざ年ハ
 寒温節の遅速は随へど多くハ此十三詣の頃花のさうりなる
 ゆゑ賑ひたること亦一はなり。于茲浪速の津高津の宮は
 傍邊ハ水尾木屋市兵衛といふ絹商人あり。家富るあり

何れぞれども活業の眞理を朝夕と心と安くせむ妻は過つる
 年身没て女子兩人を養育みせるが姉と此とよびて今年十八
 才妹と花と号て十三才なるが浪速さうりの例にて男女十
 三才よりれる春ハくまひ嗟峨といふざれハ生涯愚あま
 つひ難し貴賤を分る京師に登りて叶はざるごとくおせるが
 故に市兵衛も妹女子の花を伴ひ彼処に詣てなやと思ふよ
 留主守る家族も何れにして姉の此のさうりハ甚便なり
 あり。永に旅路といへるあり有ざれば家と鎖て同胞とも打つ



三月十一日の未明より。大江の岸なる八軒家の舟場に至り三十
 石の晝舟に乗つ京師とさして登る。纜とともあり早く血
 氣壯人の水主の従舟の左右と身軽に歩み棹とりのべき
 指登り。又岸に飛上り。注はそそぐ引登る其形勢もつと
 ましき変もるり。舟中多くの十三詣の人々まで各男女の
 童と伴ひたり。既其日の午此刻の時分。牧方の辺にありて
 つらつら市兵衛親子の借切る場所。つらつら僅り
 仕切の竹一筋と隔て隣る場。三個の男寛座をかき

坐し。るが何きも全身は模様と彫て入墨し額と細くぬき上
 眉毛と作し。都て其人品よろうさるら先のはとより樽
 と傾け蓋と巡ら。大は酒宴と催し浮きるが其中に親分
 とおぼしめて年の齡四十より近き男と女の程より二
 人の女子が艶るふ懸想せし。つ押へつ三人が蜘蛛は巡
 らる。蓋ののりきと取り幸よ女子が方打むひや姉御
 こい近ごろ不眠る。此蓋のつもと一才のいそ
 むいもと言もあめ氣酒をげん娘二人のどめより不善

者の隣は河りて甚うるさく思ひしうども舟中の変るれば退
くべき野もさくして心苦しく思ふるればつらで此杯と心よく
づき様う。忽面と赤らめつ。おそく吾儕の酒の不重宝とて
一滴も飲得ねば御志し有がけきと平に免さるるべしと。
盞と手おごもふまごぞれば此男の尚おしつる生を得て飲ぬ
ぬは強て言はれ野暮まぐ。酒の心は随ひて飲と飲ぬと勝
手こまうせと盃と持ひて。其かゆし口りとの紅粉ど
よつてむらぶ飲より百倍まらるるなり。男が頼むりけとて。

一寸くと盞と娘が面よさうつくる。此のまゆの醜態も應答も
あさびさう俯とそわたりが。市兵衛の流石も萬よわれさ
男らんば彼者又對ひて慇懃に禮とわら女子どもが退屈と
慰むとの誠心より。ぬりり盃と頂さすのせぬの失禮うか
此同胞の兩女とも。酒とつひて白酒の右ろり甘酒さへも忌
ひて器と手よさへ觸とべらひ斯る時よ愛相もあ
其侘言の挨拶のさるるあぬの親のまご躰のゆきこと
何事も我よめんとて免さるるべしと數く侘言を演るしつども。

悪癖ある黨なればすべし行ぬ言ぐや。頭を左右より
 あり親御の仰の所理なれど吾も男は端として世間
 貞と知進者ゆゑ思ふとさうさうる益と手かたにまきんその
 まいで耻がされとて言とての子分の者へも面がせ只此うへ
 づさぬゆも貞が立ねば済されどと侘言さうね横利屈ふ舟
 中の乗合もひとすふ市兵衛親子と氣の毒と思ふより。
 諸ともと侘言の挨拶おせども益と募り弱く附こむ厄
 病神二人の子分も声のどげ親分は耻うされては己れも

顔ぐげと圓なる眼とむと出勢いつく見えたるは挨拶と
 せし乗合人も為方なくて飽倦とく恚いせんと猶豫は舟中
 たぐひは面見あせ心と勞とるどくりりり市兵衛は只常
 言とて尽して侘まども聞分とて風色もあつとて是いつ
 ある因果とてかゝる憂目とあふとてと胸とらとむるど所
 理あつとて

○舟路の闘諍

かゝる折々先の程より。舟梁の柱と隔て表の方と窺とる



環山

つげこひ風のく
水ざうす
さし
しやぐれ

岩右門

すめりあつらん
まけるのかうて
つるうらわが
でるい

九良藏



野路の玉川

たか

市兵衛

堂六

のどやわが
くげそと
ゆらゆら
あやまつこ

ものおのり
おこり
まや
まや

この

これり
えは
下
ま

形勢せし。幕内と思し角力取一個の弟子と連なるが。始
 終の様子と聞え絶え。稍いつく起あがり。隔の竹とうら
 越つ。市兵衛が坐しる所へ出さるるを眼よ角立て敦圍
 親分乃男と對ひる。肥前玉島に住む環山力右工門
 としきて。數おも入ぬ者あまど先くつり。容子とさゆん。
 受る受ぬの蓋の言ぐやより。羨つし。爭論由縁くる。わ
 らねも。足弱連の心勞と乗合衆の迷惑と見くめて出て来
 と挨拶人此とさゆい何とまれ吾と預けてる。いば。畢竟

顔の立ちぬ。つちも些い得手勝手。又丈夫氣さく老人や
 女と相手のつさゆい。親分もらと似合は。と立ちこけつ。関
 取が四十八手の挨拶と余所へすり。と不與氣。とさゆい。豫
 聞み。び。環山とい足下。り。番附の面で。年々見るれて
 馴染あまども。あまど。會いと。めえ。我の越中多古島。り。と
 浮洲の岩右工門と異名と。と。田舎者又この二人。鉄火
 の堂六闇雲九郎藏と。我等。子分の者とも。見知
 て置て。むり。時。思ひぬ。今日の喧嘩。関取。挨拶。ゆら。

彼是ありよすれなりと。濟すと苦るれど。手つゝ人の換
 杉ゆへ苦もろく。濟と言きて。子分の手も。世間の外聞
 づく。以て濟う。関取の世話つて。我等が白の立やうか
 して。ぬりも。邪入。聞ぬ喧嘩。カ右工門。心中
 志を。怒り。疾す。程も。妻と納めんと。尚
 も。詞とやり。種々に言あ。むき。邪く。悪黨
 ども。聞く。景色も。わづな。バカ右工門。詞と。あ
 斯す。で。男が。妻と。ひ。侘る。く。美引。白と。立よ。

望ま。う。我。お。ろ。う。て。暁。に。恨。ま。せ。ば。白。立。や。ら。う
 ま。ほ。く。と。わ。づ。な。岩。右。工。門。の。打。う。か。つ。と。突。の。つ。も。ろ。う
 問。言。あ。り。別。に。変。じ。事。も。わ。づ。な。と。其。姉。娘。と。媒。し。て。こ。ら
 女。房。よ。ぬ。り。ら。夫。が。る。ら。娘。の。細。首。を。め。く。吾。濟。よ。ぬ
 り。れ。と。而。段。ま。う。あ。ぬ。こ。と。言。う。る。悪。口。は。カ。右。工。門。益。て
 憤。り。ま。を。し。沉。吟。よ。く。わ。づ。な。が。稍。ゆ。め。の。つ。も。ろ。う。恨。ま。も。而
 段。の。註。文。ど。り。一。品。の。叶。へ。る。白。と。立。べ。し。足。下。が。さ。し。と。盃。と
 手。よ。づ。な。あ。ま。ね。娘。と。く。女。房。よ。ぬ。り。の。媒。の。猫。の。あ。ら。よ。

橙子と押しむよりも無利なれが兎ても角ても接少くひ三々
 九度の破土器夫よりいま首取る。進せる方が変やれし。
 それでも娘の首とめく其方れ首の行末いどよ為つめを
 と問つめま流石の邪もどららうと詰つて返れ詞もふ
 く此時岩右衛門の酒氣十分は羨して頗る怒氣さるん
 ふまば有合の木枕つうむと見へし。斯すると力右衛門
 が面と目ぐけて打くる心得らうと頭をかき。あま上るうで
 引とく堪忍ぶくられ破き口少くも憎しと膝頭は手を

かふるよと見えし筋斗と舟端より川よごんぞと投こん
 ぐり堂六九郎藏の大は駭き悪き所為と立河ぐり刺刀ぬえと
 手とかくふ抜せも中へ兩人とも引つら。いとく川へ投こぬ。
 市兵衛親子の言も更なり舟中の乗合人も惶き怖を面青
 さめ胸とどろろえんぐり力右衛門の舟頭は向ひ何方あもあま
 此舟と岸をつくべ。我くこより上り得せん。さすれば舟より
 るく又乗合の人にも憂更りて心安く思されんとつや舟頭は
 大は悦び直は舟と汀は漕ませ歩の板とけり。せは力右衛門は



たふ

この

あつちなりあわが
ふらふら
あつちなり
あつちなり
あつちなり

あつちなりあわが
ふらふら
あつちなり
あつちなり
あつちなり



環山

沖津浪

おせは
あつちなり
あつちなり
あつちなり
あつちなり

市兵衛

モウ川下であつち
あつちなり

伴ともなひいで弟子でしのらもも陸くが上うる。市兵衛おや親おや子こももうう上ある。
 水みづ主ぬしのらもも悪わる者ものがが所ところ持ものら品しやう々々一いつ所ところははああららめめ岸きしははららまま
 りありあ揚あげげるる人ひと々々別わかれれるるつつげげてて五ご人にんひひくくくく打うち連つれるる何なに
 方かたもももも立たちちぬぬ舟ふね子こもも手てををややくくもも纜わづらととたたつつはは上のる。
 既すでにに八はち人にんのら一いつ時ときはは減へらられれ舟ふねのら河がはにに甚い々々軽かろくくりりてて舟ふねのら
 行ゆくくとと矢やをを射やるる。二ふた人にんのら悪わる黨あつのら淀よど川がはのら急いそ流ながはは浮うつつ沈しずままる。
 瞬またたとと其そのららにに見みへへばばりりぬ。

復讐言野路の玉川卷の一終

